

演劇的手法を用いた日本語教育

—学際的アプローチ—

縫 部 義 憲

1. 「共生主義」の思想

本論文では、中・上級段階の日本語教育のあり方に焦点を置いて考察していく。日本語教育に対して、日本語教育学・日本語学・言語学・日本文化学がどのように有機的に相互に関連をもちながら、独自の関わり方をすることができるのであろうか。この疑問は、外国語教育としての日本語教育システムを形成するという前提から発している。

では、日本語教育というシステムはどんな内容なのだろうか。そのシステムを実際の日本語授業において、どのように具現化したらよいのであろうか。また、日本語教育において、この4つの独自の学問を結びつける哲学や観点は何かであろうか。この疑問の解明に、原口(1987)が唱える「共生主義」という概念を手がかりにしたいと考えた。この概念は、禅で言う「無自性」や「一体・一如」という考えと本質的には類似している。

共生主義という概念の説明に入る前に、無自性、一体・一如という概念を先に説明すると、共生主義という概念の理解に役立つと思われる。「無自性」というのは、いっさいの事物は、種々さまざまな諸要素の有機的組合せによって成り立ち、それ自身独自の特性というべきものは、何一つもないとの意である(田里 1973: 7)。例を挙げれば、人間の目は人間のからだから取り出して「これが目だ」といっても無意味なのである。それは人間のからだから離れた瞬間、もはや目の働きをしなくなる。したがって目はいえないのである。目は人間において他の器官と一体になっていてこそ、目たりうるのである。学問は、目だけを取り出して、分析的に研究しようとする。学問は客観的妥当性を求めるからである。この客観は、自己を除外して対象のみを論じるのである。

ところが、教育においては、そこに自己が立つのである。自己が対象と一体となるのである。「一体」とは、「自己」が「こと」と「もの」に対してもつ「一体感」をいうのである。また、「一如」とは、

「自己」が「こと」を行うにあたり、それに関連あるいっさいの事物と「一体」となって「同時参加」することである。つまり、「一体」とは、全ての事物と有機的関係に立つことであり、「一如」とは、全ての事物と有機的に行動することである。

では、「共生主義」とは一体どんな概念なのだろうか。それは「共に」よりよく生きる主義ということである。一般的な言い方をすれば、「共によりよく生きる」というのは地球のすべてのものと調和してよりよく生きるということである。教育においては、「共によりよく生きる」ための教育を中心に据えないと、バランスがくずれて、人間の心が狂ってしまう。学問においても、それぞれ異なる学問の個性を発揮し、多様な考え方、物の見方をしていかないと、学問が発展していかないのである。さて、共生主義の立場に立った教育においては、違いを尊重し、違いを理解し、楽しみ、愛することのできる人間、他者とは違う個性をもつ人間、を育てることが肝要である。異質な個性と個性のぶつかりあい(encounter)があるからこそ、豊かな人間性が育まれるのである。学問においても、異質な学問間のぶつかりあい(encounter)がなければ、学問は停滞してしまう。

この意味において、日本語教育学は、その基礎科学や隣接諸科学とのぶつかりあいがあり、且つ、各学問間に平等な関係が保たれ、それぞれの学問の独自性が発揮されるという関係、つまり、共生的関係を樹立しなければならない。共生主義を実践に移すに当たって重要なことは、人間・文化・学問は実に多様であるということ認識し、その多様性や違いを理解し尊重することである。その上で、調和のとれた共調を行い、それぞれの多様性を生かしながら、共によりよく生きていくためにどうしたらよいのかを模索しなければならない。

禅やカウンセリングでは、「いまここ」に生き、ありのままの自分を見つめ、異質な個性のぶつかりあいによって異質性に対する寛容さを獲得していく。ありのままの自分を感受することが悟りへの道であり、これが人間の幸せなのである。これだけだと、

よりよく生きることはできても、「共に」よりよく生きることはできない。そこで、お互いの違いを尊重し、許容し、承認することが大切となる。これを「多様性の共立」と原口氏は呼んでおり、共生主義の普及を図るためには、多様性の統一ではなく、多様性の共立が必要だと強調している。多様性の中で特徴ある文化を発展させ、その違いから、いろいろな知見を得ることが重要なのである。

2. 劇化と人間学

禅は人が生き生きと生きる方法を教え、共生主義は人が共によりよく生きることを教える。教育は、学習者に生き生きと、よりよく生きる力を育てることをその任務とする。日本語教育の原点は、日本語を学ぶことを通して日本語能力を伸ばすと同時に、生き生きと且つ共によりよく生きる力を発達させることにある。

このように、自己を除外して、日本語という学習対象を客観的に獲得することは日本語教育ではなく、日本語教授とでも呼ぶものである。単に日本語知識を獲得してもそれだけでは生きて働く知識とはならない。その知識と「一体感」を持ち、すなわち、ひたすら無我夢中に学習対象に心を集中して学び、その後で、集中的に行動の中でそれを生かしていく(→一如)。その言語活動の中で、自己は他者との関係の中でのみ存在することを学ぶ(→無自性、共生主義)。

ところで、自己と対象との一体感を持つには、自己をよく知り、対象(日本語)をよく理解することが大切である。自己をよく知るためには、あるがままの自己を見つめることである。そのためには、今ここに生きることであると禅とカウンセリングは唱えている。現実には生きることができるようになるために、今自分がしていることに注意を向けさせる。

禅では只管打座(座禅)を用い、カウンセリングやサイコセラピーでは、「今ここ」に対する意識化を重視する。自分のジェスチャー、呼吸、感情、声、顔の表情などを意識させるのである。学習者の内面に、今ここで生起していることのありのままをゆがめずに感受させる。これが望ましい日本語学習の基礎になるのである。学習者の内面に今ここで生起している出来事に集中し(一体)、それを日本語練習の内容として活用する(一如)。それをどのように自己表現するかが大切な指導の中味である。日本語

での表現の仕方もある。それだけでなく、自分の感情をどう表出するかということもある。日本語という言語に自己の感情や欲求などを加味して自己表現しなくてはならない。感情を伴わない会話は無意味である。練習のための練習では、本当のコミュニケーション力は身に付かない。

何を伝達するのかと言えば、自己である。何で伝達するのかと言えば、日本語という道具である。誰に伝達するのかと言えば、他者である。どこで伝達するのかと言えば、教室内か教室外である。自己を表出し、自己を伝達するには、お互い尊重しあう雰囲気がないと伝達意欲は湧いてこない。人と人との間にコミュニケーションが存在し、単に日本語の教材を暗唱するのではなく、会話作業を行うと共にある意図したことを伝達するとき、つまり、自己にとって真実で意味のある内容が伝達されるとき、それは広い意味の「ドラマ」となるのである。

以上の理由から、そして共生主義の観点から、日本語中・上級の指導として演劇的手法(drama technique)を採用しようと考えた。演劇を目的とした指導ではなく、演劇的手法を取り入れて、それを手段として用いて、生き生きと、共によりよく生きる日本語経験を持たせることが目的である。演劇的手法の導入でまず最初に考えなければならないことは、「自己」についてである。全ての演技は個人の感情を表現しなければならない。だから、教師は、演出家のように演じる学習者に台詞の1行1行の話し方や動作の演じ方を指図してはならない(Via 1987: 112-113)。学習者は日本語授業で俳優のようなレベルに到達できるわけでもない上、人の模倣は学習者個人にとって真実でもなく、演じる人の内面から自発したものでもないで、自己と対象(日本語)との一体を持つことができないのである。ありのままの自己を見つめ、ありのままの自己を自然に表出できるように援助することが教師の仕事である。

さて、コミュニケーションにおいては、語彙+構文=言語であるという考えは乗り越えられていると言える。つまり、それに加えて自己という概念を挙げる必要があるというわけである。いかなる練習にも自己の感情や欲求などを付け加える必要がある。この自己というのは、強い「個人主義」と混同してはならない。それは個人の個性なのである。自己を定義すると、「われわれの生得的な部分」であり「遺伝に規定された部分」ということになる。集団

の中に自分のいる場があり、他者も自分のいる場が保証されていること、これを「自己同一性」(self-identity)と呼んでいる。

安全のために、つまり、自己防衛の余り、自分の感情を表現しないで、台本の役割と台詞に従って自己を隠すことは良くない。自己とは違う人になりきるように訓練すれば、自己の感情を表現することを拒むだけでなく、自己に対して責任を負う権利をもつ学習者から奪うことになる。この意味において、教師が演技を与えてそれを模倣させることは教育的には好ましいことではない。そのためには、「もしあなたが～の立場であれば、あなたはどうか、どう感じるか、どう言うか。」を常に問いかける必要がある。いわば、それを演技の中で表現していくわけである。

3. 劇化指導プログラム

日本語日本文化研修留学生(日本語教育学科研究生)(15人)を対象として、1セメスターの中級日本語コースを3人の教育が指導した。日本人学生(日本語教育学科3年生15人)がインフォーマントとして加わり、日本語実地指導を受けた。つまり、教官は日本語を教え、日本語基礎学習の指導を行ったわけである。そのために、日本人学生は、日本語教育実地研究という演習の授業を登録している。この専門の授業との有機的関連の下に日本語コースは運営されたわけである。

日本語コースは、組織化された日本語劇化プログラムに従って指導された。このプログラムは、15回分の日本語授業の計画に基づいて作成された。大まかな日程表から説明すると、このプログラムの柱が分かる。

- (1)リレーションづくりの体験学習;教材選定(1コマ)
- (2)教材学習:リーディング指導(3コマ)
- (3)脚本作成:ライティング指導(3コマ)
- (4)演技基礎練習:恥ずかしさ克服と雰囲気づくりのエクササイズ;脚本の読み合わせ;ムーブメントの基礎(2コマ)
- (5)演技応用練習:立ちげいこ(3コマ)
- (6)リハーサル(2コマ)
- (7)演劇発表会(1コマ)

資料1

ドラマ・テクニックのための人間学プログラム

ステップ1.

(テーマ)集う一責任者:縫部/担当者:縫部・学生(ねらい)教室風土づくり:恥ずかしさを取り除き、リラックスした友好的な雰囲気醸成するとともに、援助的人間関係を形成する。

(エクササイズ)

A. ことばによるもの

1. ネームゲーム:20人以内で1グループを作り、円座する。ある人が名前を言う。その右隣りの人は、自分の名前を言った後で、左隣りの人の名前を言う。こうして最後の人まで行くと、逆回りをする。
2. 身分証明書:20センチ×25センチ位のカードに次の情報を大きな字で書く。中央は名前、左上に自分の特徴、左下に好きな歌手、右上に得意なこと、右下に行きたい国を書く。首から紐でカードをぶらさげて、音楽に合わせて歩く。音楽が止まったら、近くの人と話し合う。
3. インタビュー:20項目のインタビュー用紙を用意する。8分間でできるだけ多くの人にインタビューし、各項目に該当する人を探す。

B. ことばによらないもの

1. ヨガ 2. リラックス体操 3. マッサージ
4. 頭を委ねる 5. 体を委ねる 6. 宇宙遊泳
7. 人間橋 8. 信頼の目隠し歩き

ステップ2.

(テーマ)関わる一責任者:町 担当者:教師・学生(ねらい)教材学習と教材研究:ドラマ教材を選び、その教材を学習する。言語材料の導入・提示、説明、学習活動と言語活動という一連の授業の流れを体験する。

- (方法)1. 毎時間、教案を作成し、一人約40分の授業を担当する。従って、1コマを2分割して教壇実習する。平均4回の実習を経験する。
2. 二種類のチーム・ティーチングの形態をとる。教師と学生とのチーム・ティーチングでは、教師が導入・説明・学習指導までを担当し、練習の段階では学生がドリル・マスターとしてインフォーマントの役割をする。授業観察から実地指導へとつなげる。学生同士のチームティーチングでは、1時間の授業を相談しながら、毎回の担当者が代

表して指導する。この段階の後半では、学生に全てを任せ、教師はヘルパーに徹する。

3. VTRを毎回とる。授業の反省に使う。
4. 授業の基本的な流れは、(1)あいさつとウォーミングアップ、(2)復習、(3)新教材の提示と説明、(4)学習活動（四技能の訓練と言語習性の強化）、(5)言語活動（コミュニケーション・ドリルとコミュニケーション活動）、(6)整理と課題とする。

ステップ3.

(テーマ) 表す一責任者：熊取谷 担当者：教師・学生

(ねらい) シナリオ化：ドラマ教材からシナリオを作成する。その過程において、音声言語と文字言語の違いを教えたり、主としてライティングの指導をすることを目指す。

- (方法) 1. 20分位のドラマに仕立てるために、シナリオの長さを検討しておく。
2. 留学生は全員役割をもち、全員がある面でドラマの主人公になる。
 3. 学生はスタッフとなって、シナリオ作成から上演までを助ける。
 4. 口語表現に熟知させる。
 5. シナリオ作成の方法は別途指示する。

ステップ4.

(テーマ) 開く一責任者：町 担当者：町・学生

(ねらい) 発声と発音の基礎練習：演技の基礎訓練の前の活動を行う。その内容は、腹式呼吸の練習、発声と声量の訓練、発音の指導である。

- (方法) 1. 恥ずかしさの克服のエクササイズから始める。
2. 次に音声面の訓練を行う。発声法と発音の練習である。
(1)母音 (2)子音 (3)かぶせ音素 (4)文 (5)談話
 3. シナリオの読み合わせを行う。表情読みの練習をする。

ステップ5.

(テーマ) 拓く一責任者：縫部 担当者：縫部・学生

(ねらい) 演技の基礎練習：演技の基本となる動作の基本練習を行う。恥ずかしさ克服のエクササイズを行い、自己表出と自己表現の雰囲気を生み出す。感受性訓練を実施する。

- (方法) 1. 恥ずかしさ克服のエクササイズを実践

する。(ギベリッシュ語)

2. ムーブメントのエクササイズを実践する。(身体各部の意識化、ミラリングなど)
3. 自己表出のエクササイズを実践する。(私の長所、類似点と相違点、私のコマーシャルなど)
4. ロールプレーやインプロビゼーションの練習をする。
5. 学生と留学生の両方が体験学習に参加する。
6. シナリオの読み合わせを行う。

ステップ6.

(テーマ) 交わる一責任者：教師全員 担当者：教師・学生

(ねらい) 演技の応用練習：演技という手段による日本語の実際の使用を通して、日本語表現力を伸ばし、自己表現と自己表出及び対人間関係形成に関わる能力を伸ばす。

- (方法) 1. 台詞と演技の練習を行う。
2. 小道具を作る。
 3. VTRにとって練習する。演技の上手下手は問題にしない。
 4. 発表会を開く。一般公開する。
 5. 発表会のVTRによる反省会。

このプログラムの柱にそって、その内容を詳しく説明する。教室雰囲気づくりとリレーションづくりのエクササイズの体験学習から始まる。つまり、ウォームアップが第1段階である。教官と日本人学生が、留学生とのうちとけた関係を形成するために、日本語での人間関係演習を行った。これは、流暢さのためのコミュニケーション活動 (humanistic exercises) の一種である。次の10個のエクササイズを選んで、最初は教官が指導し、日本人学生はそれを観察参加した。日本人学生は、その後、自分に割り当てられたエクササイズを指導し、残りの日本人学生は留学生といっしょになってこれらのエクササイズを体験学習した。

A. 言葉によらない人間関係演習

- (1)マッサージ： 2人1組のペアを作り、同じ方向に前後20センチ間隔で立つ。後ろの人が、前の人の肩、首筋、背筋を軽くポンポンとリズムカルに叩いてマッサージする。しばらくしたら、役割を交代する。支え合う体験になる。
- (2)後ろに倒れる： 2人1組になり、同じ方向に立つ。今度は少し前後の間隔を狭めて、15センチ

位開ける。前の人はかかとを軸にして後ろに倒れかかり、後ろの人はすぐ支えて元へ戻す。これを3回ずつ繰り返す。これも支え合う体験になる。

(3)信頼の目隠し歩き： 2人1組のペアを作り、一方が目を閉じ、他方が相手の手を引いて誘導する。口をきいてはいけない。いろいろな歩き方、早く歩いたりゆっくり歩いたり、跳んだりはねたりする。階段を上がり下りしてもよい。いろいろな物を触らせたり、匂いをかがせたりして、いろいろな体験をさせてもよい。交代する。

B. 言葉による人間関係演習

(1)ネームゲーム： 15人位を一グループにして、輪になって座る。ある人から自分の名前を名乗る。その右隣りの人は、自分の名前を名乗って左隣りの人の名前を繰り返す。以下同様にして、最後の人まで行くと、今度は逆回りをする。二サイクル目には、自分の名前に得意なことを添えて言うてもよい。

(2)身分証明書： 20×15センチ位のカードに次の5つの情報を書かせる。中央に名前、左上に性格特性を表する形容詞3つ、左下に一日一緒にすごしたい人、右上に得意なこと、右下に今行きたいところを書かせる。カードを胸に留めて、音楽に合わせて歩く。すれちがうとき、軽く会釈する。音楽が止まると、回りの人とペアを組み、カードの情報について日本語で話し合う。音楽が鳴り始めると、再び歩き始める。4～5人の人と話し合わせるとよい。

(3)インタビュー： 参加者の数位の質問項目をプリントしておく。各項目について、いろいろな人に一対一で話し合い、該当する人を探す。見つかったら、その人の名前を該当する項目の隣りに記入しておく。制限時間内でいくつの項目が埋まったかを競争する。できるだけ多くの人に話し掛けることがねらいである。一人の人から1つの情報を得ると続けて同じ人に質問してはいけない。

(例)へびが好きです/来月誕生日です/肉が嫌いです/プロレスが好きです

(4)私の秘密： このグループの誰も持っていない物、したことがないこと、ユニークな性格特性など、つまり、人と違うことを3つ紙に書かせる。裏に記名させる。それを教師/実習生が読み上げ、その情報の主を当てさせる。相互理解を深める。

(5)ブラインド・デート： 隣の町の人とデートをすることになった。初対面の人であるので、顔

が分からない。お互い相手に自分の特徴を手紙で書いて知らせることにした。自分が見分けられる内容を書くように言う。それを壁に貼り、その手紙を読んで誰かを記入する。その後で、手紙の主を発表する。相互理解を深める。

これらのエクササイズを実施する前に、教官が日本人学生に指導の仕方とその留意点、およびミニ教案の書き方の事前指導をした。「身分証明書」の例を基に、次のプリントを配布して指導しておいた。

資料2

リレーションづくりのエクササイズ

ーミニ教案の書き方ー

(例) <身分証明書>

1. 目的

①情意的一新しいクラスをくつろいだ雰囲気にする。たやすく知り合うように手助けする。知らない人に話しかけさせる。

②言語的——一人称、二人称で話す練習をする。問答の練習をする。

③相互作用的一一斉形態

2. 用意すべき物

15×20センチのカード、ピン又はテープ、音楽テープ、TR

3. 手順

(1)導入

(略)

(2)展開

①カード、ピン又はテープを配る。

②必要な情報を書く。

③カードを胸に留めて、音楽に合わせて教室内を歩き回る。

④すれちがうときに、挨拶する。

⑤音楽が止まったら、近くの人とペアになる。

(留意点) 知らない人や余りよく知らない人とペアを組む。

⑥相手のカードの情報について話し合う。

(留意点) 日本語の段階に応じて、次の3通りの対話の仕方がある。第1は、一方が尋ね、他方が答える。第2は、相手のカードに書いてあることを話し、それに自分の情報を加える。第3は、カードに書いてある情報について、コメントしたり、質問したりする。

⑦5～6人の人と話し合う。

⑧最後に、何人かの人のカードの項目について思い出させる。

(3)整理・課題

4. 留意点

- (1)からかったり、ふざけたり、ばかにしたりしない。
- (2)批判したり、非難したり、攻撃したり、評価したりしない。
- (3)ホンネを出すようにする。うそを言わない。
- (4)言いたくないときは、発言をパスしてもよい。
- (5)参加を強制しない。
- (6)あるがままを受け入れ、尊重する。
- (7)言葉じりをつかまえるな。感情をつかめ。
- (8)直そうとするな、分ろうとせよ。
- (9)相手の発言の邪魔をしない。
- (10)優しさの中にも毅然たる態度をとれ。

これらのエクササイズに実際は2コマ使ったが、それでも時間不足であった。教室の雰囲気づくりには大変大きな成果があった。第1段階の雰囲気づくりの後は、第2段階の日本語教材の選定と学習である。教材は日本文化を課題として選ぶことにし、日本昔話を取り上げた。5つの昔話を日本人学生が選び、そのあらすじを口頭で説明して留学生に好きな物語を選ばせた。その結果、「かさ地蔵」と「わらしべ長者」が選ばれた。留学生の希望を取り入れて、この2つのどちらかを選ばせてグループを2つに分けた。教材学習の段階では、全員両方の教材を読んだ。

教材学習のリーディング指導および脚本作成の指導についての報告については、割愛したい。筆者の主たる担当は、上記の日本語プログラムの第1段階と第5段階であるので、第2～4段階をとばして、以下で第5段階の指導の報告に入る。

第5段階のねらいは、自己表出の基礎練習である。内容としては、恥ずかしさ克服のエクササイズの体験学習とムーブメントの基礎である。恥ずかしさ克服のエクササイズとして、「動作を観察する」「鏡になる」の2つを行った。動作を観察するというのは、ある人が日常よく行う一連の動作をし、それを見て何かを日本語で言う。最初、教師が動作をして留学生に日本語で答えさせる。次に、グループか二人1組で交代で動作をさせる。

動作としては、起きる、歯を磨く、顔を洗う、服を着る、髪をとく、食べるなどを用いた。

鏡になるというのは、二列(同数)に同じ方向に並ぶ。前後でペアになって、前の人とする動作を後ろの人が真似をする。最初は少し難しいから、上半身だけを使った動作をさせ、少し慣れてきたら全身を使って動作をさせるとよい。反対の方向を向いて交代する。真似をすることに慣れ、恥ずかしさが少し取れてきたら、全員が大きな輪を作り、代表が一人輪の中に出る。ディスコ調のリズムミカルな音楽に合わせて、代表者は自由に動作をし、回りの人はそれを真似する。模倣だから意外と照れが少ないものである。しばらくしたら、誰かの肩をポンと叩いて交代してもらおう。どんどん交代させるとよい。人に支えられた体験にもなる。

次にムーブメントの基礎について説明する。ムーブメントとは動きの言語のことで、ムーブメント教育というのは動きの言語を教えることである(佐野1977, 1982)。例えば、嬉しいときには跳び上がり、口惜しい時には地団駄を踏む。不安を感じると体をちぢめる。これは、内的な感情が自ら身体の動きとなって表現されたものである。すなわち、身体が話しているわけである。動きの言語によって「今ここ」でのその人の気持ちが出る。ここにも一種のコミュニケーションが生じている。こうした無意識のうちに行われている身体表現を意識化させ、動きの言語を教えることによって、自己表現の能力を高め、同時に人間的成長を図ろうとするのが、ムーブメント教育の基本である。

ムーブメント教育では次の4つのテーマが重要なポイントとなる。

- ①身体：身体の中のどの部分を用いるか。
- ②動きの質：どのように身体を動かすか。
- ③空間：どこで身体を動かすか。
- ④関係：何と、また誰と一緒に動かすか。

動きの言語では、この4つのテーマを体験させればよい。そこで各テーマに重点を置いたエクササイズを課すことになる。授業で実際に実習生が行ったのは、歩く実験である。普通に歩く。次に、コップの水をこぼさないようにゆっくり歩く。熱い砂の上、川を横切る。時間におくれないように急いで歩く。このような状況設定で実際に指示に従って留学生に歩かせた。人がどのように動くか、歩いているか、自分とどう違うか、に注目させながら歩かせる。

一列に並ばせて、想像の中で赤ちゃんのリレーを

させる。つまり、実際の赤ちゃんではないが、赤ちゃんを渡し、受け取る振りをさせる。渡し方や受け取り方に個性が現れる。表情や動作を多少オーバー気味に表現させるとよい。これもムーブメントの一種である。

上記の二つの日本昔話の中に、動きの言語として次のようなものがある。

- ①観音様に願をかけてみた。
- ②男は大喜びで、お寺の門を出て行った。
- ③いやじゃ、いやじゃ、早くうちにかえろう。
- ④じいさまが 急いで行く。
- ⑤なさけなさそうな顔をしてござる。
- ⑥どのお地藏さまも、さむそうにふるえてござる。
- ⑦せせせと歩く。
- ⑧みように身がかるい。
- ⑨ばあさまは、じいさまのきものにかかった雪をよくはらってやった。
- ⑩じいさまとばあさまは、おっかなびっくりおもてへてみた。

これらの動作を伴った台詞や感情を伴った台詞をいくつか取り上げて、日本語表現に動きや感情をどのように乗せていくか、どのように結合していくかという演技の基礎練習を行う段階に入る。単に与えられた台詞を暗記して思い付きの動作をさせるだけでは、教育的配慮が足りない。これでは無意味である。これでは、正確さ (accuracy) のための日本語練習にすぎない。流暢さ (fluency) のための日本語練習へつなげるためには、演技の基礎練習の段階へ入り、コミュニケーションの観点からどのような工夫をしたらよいかを考えなければならない。この点は次の節で考察してゆくことにする。

4. 演技の基礎練習

台詞を持って読み合わせを行うようになると、留学生は生き生きし始めた。受け身の授業から能動の授業へと転換したからである。感情や表情を豊かに台詞を読む練習を繰り返した。内容が理解できているから、この台詞はこのような場面でのこのような気持ちで表現されているということを頭の中でイメージしながら、読み合わせを行わせた。内容を十分理解した後で音読させるとというのが鉄則である。この場合の音読は表情読みである。かぶせ音素にも注意し、感情をどのように付加していくかがポイントである。

演技の基礎練習に入る前に心配していたことは、儒教の国では人前で感情を表出することを嫌がり、自己表現が概して不得手であるという点である。韓国・台湾などと華僑の一部にこのような傾向があるので、演劇的手法には抵抗があるだろうと予想していた。やはりかれらの多くは脱落していき、韓国の留学生一人だけが残った。アジア系では、韓国人一人と中国人は全員残ってくれ、残りは欧米系の留学生で演劇の基礎練習は始まった。因みに、アジア系として、中国、韓国、台湾、シンガポールの留学生が登録していた。このような国民性の差にどう対処するかは、今後の課題の一つである。

台本を見ながらの読み合わせの次に、演技の基礎練習に入った。留学生は読み合わせをいくら行っても場面感が十分湧かないので早く立ち稽古をしたいと申し出てきた。実際の場面の中で、他者とのからみを「体感」しながら台詞を実感していきたいという。日本人学生がスタッフとなり、その中から各班のディレクターを決め、残りの学生は演技のコメントを随時与えることにした。演技の基礎練習を本格的に開始する頃から、出演者 (留学生) は非常に積極的な姿勢に変わり、出演者がお互いに他者の演技に対する意見を出し合うようになった。みんなが支えて、みんなが作る演劇ができる雰囲気が生まれてきた。自分の役割は、他者 (全体) との関係においてのみ意味を持つてくるのが、演技の面白さと難しさである。

演技の練習のとき、出演者とスタッフの間で解釈や演技のあり方で食い違い、議論する場面もあった。生活実感の乏しい日本人学生は、もちつきを知らない留学生に演技の指導ができない。米人男性の主人公と中国人女性の主人公が、息を会わせてもちつきを行う場面には困っていた。もちつきという日本文化についての臨時のミニ講義を始める。夫婦が助けあい、呼吸を一つにして、一つの仕事をするという、一種の夫婦間の人間関係づくりに自然に役立っているという説明までする。日本語を実際の場面の中で使いながら、言語は人と人を結びつける働きをする。特に、日本語は「思いやりと人間関係の言語」と呼ばれる所以がこんなところにもあるという趣旨の話しをすると大変興味を持った。

日本語教材の文字を追って意味を頭で理解しても、実際にその内容を動作で示させると本当には分かっていないことが多いと留学生は気付いた。演技をしたからこそ、初めて分かることも多い。例えば、お

地藏さんが出てきた。絵を見せて分かせようとした。地藏という語の辞書的意味を絵をという手段で理解させようとした。しかし、留学生はそれだけでは満足しなかった。地藏は、何のためにあるのか、どこにいるのか、なぜ手をあのような格好にしているのか、赤いナブキンは何かなど、日本人学生は質問責めに会い、立ち往生していた。日本語と日本文化が密接に絡み合っていることが実感された。これも日本語教育基礎実習としての意義の一つであった。

演技を実際にするを通して、文字の世界だけでは決して得られない様々な教育的価値がある。パーバルとノンパーバルとの関連が実感できたこと、日本語と日本文化との関わりが分かったこと、行間にある描かれていない、見えない部分が顕在化すること、感情付加によって本当に実感を持った言語知識が得られること、日本語使用を通して人間関係を体験すること、日本語教室内にラーニング・コミュニティを形成すること、本当にコミュニケーションに近い言語体験を持つこと、自己内省・自己開示・自己表出・自己表現の体験を積むこと、といった言語教育的価値がある。

演技を指導するとき、演劇をすること自体が目的ではなく、日本語を通して自己を開発し、日本語にのせて自己を表出すること、日本語で自己と他者とのインターアクションを体験することが目的なのである。その手段として演劇を使用しているにすぎない。演技の上手下手などは論外であり、教師が演技を与え、学習者がそれを単に模倣するのでは、本当の演劇的手法の利用の仕方ではない。何度も述べたように、常に「この場合、あなたならどう感じますか/どう振る舞いますか。」と学習者に問いかけていくことである。そして「私なら～する/～感じる」という答えを演技で表現させるのである。日本語に感情を付加することの意味がここにある。学習者に「教師に踊らされている」という気持ちを持たせないように留意すべきである。

こうして演技の練習を積み重ね、留学生による演劇を発表する時期がきた。発表の場として、大学の近くの幼稚園を選んだ。一つは実際の観客が欲しいと思ったこと、二つは地域との交流を持ちたかった

こと、三つは日本昔話しだから幼稚園の児童が興味を持つと思ったこと、がその主な理由である。日本人学生が幼稚園と交渉し、受け入れの許可を取ってきた。さらに、リハーサルに幼稚園の講堂を借りる交渉までしてきていた。全員が一つの目的に向けて、一丸となって取り組む真剣な姿勢が生まれていた。教師は傍観するだけの援助者の立場でしかなかった。

5. おわりに

劇化は一般に「なめらかさ」の練習ではなく、「正確さ」の練習だと考えられている。台詞を単に暗記して動作をつけるだけで「劇化指導」を行ったとすれば、その通りである。「正確さ」の学習活動を基礎として、それを「演劇」という手段を用いて「なめらかさ」の言語活動へと応用発展させてゆかなければならない。言語という道具を通して、自己を表出し、個と個のぶつかり合いを行うところまで言語活動を深化させてゆけば、それは Real Communication へと到達するはずである。本論において、そのためのコース・デザインを具体的に提示した。

引用・参考文献

1. 原口庄輔「共生主義」『筑波英学展望』1987年、6号、9-17。
2. 田里亦無『道元禅入門』産業能率短期大学出版部、1973年。
3. Via, R. A., *English in Three Acts*, The University Press of Hawaii, 1976.
4. 佐野正之『英語劇のすすめ』大修館書店、1977、1982年。
5. Nuibe, Y., "Humanistic Japanese Language Education in Pursuit of Integration of Group Encounter and Dramatization-" 『日本教科教育学会誌』1990年1月、14巻2号、41-48。
6. Maley, Alan, and Alan Duff (1978, 1982), *Drama Techniques in Language Learning*, Cambridge Univ. Press.